

展示品一覽

前回の展示に引き続いて奥州街道図が3舗展示されている。右の『日本図』（カナ書特別小図・東日本）の赤枠がその範囲である。何れも第一次測量の往復、第二次測量の復路の成果である。

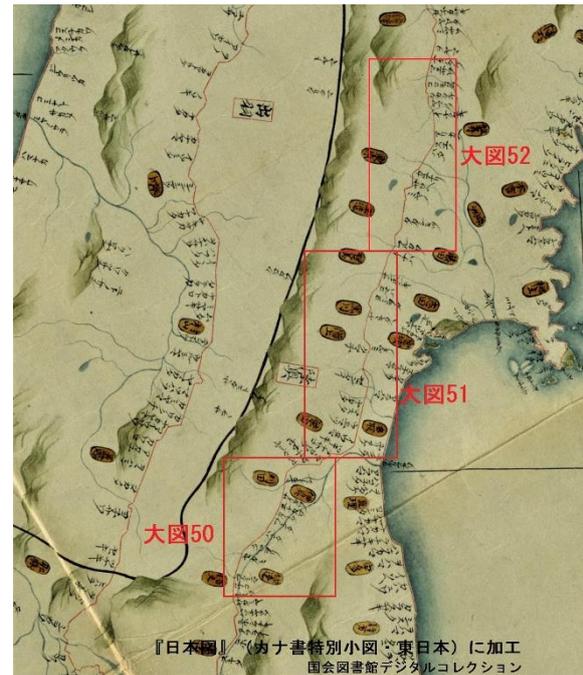
○ 大図（奥州街道：岩手県奥州市～宮城県大崎市） 「奥州街道図第八（自古川／至前沢）」

国宝：地図・絵図類 番号 52、縮尺 36,000 分の 1

「自古川 北 四尺六寸七分一厘 至前沢 東 九寸九分三厘」と古川から前沢までの地図上の寸法が墨書されている。この大図の範囲は寛政12年閏4月29日～5月1日、同年10月4日～6日、享和元年11月19日～21日に測量した区間である。大図の測線は奥州藤原氏三代や義経ゆかりの中尊寺付近を通過しているが立ち寄った形跡はない。享和元年11月19日の『測量日記』に「左は高館の跡なり」とあるだけである。第1次、2次測量では後のように神社仏閣や名所旧跡に立ち寄る余裕はなかったのであろう。

次の図は忠敬ゆかりの秦檜麻呂（村上嶋之丞）の「大日本國東山道陸奥州驛路圖」という街道図から中尊寺付近の部分である。

序文には寛政12年春正月とあり、忠敬はその年の6月1日に蝦夷地の一ノ渡で村上嶋之丞を訪れている。本図は国会図書館デジタルコレクション、筑波大学附属図書館貴重書コレクション、青森県立図書館デジタルアーカイブで公開されている。なお、筑波大学の図の序文には「間宮倫宗（林蔵）校合」とあり、役者が三人出揃った感がある。



『日本図』（カナ書特別小図・東日本）に加工
国会図書館デジタルコレクション



「大日本國東山道陸奥州驛路圖」（二）に加筆（国会図書館デジタルコレクション）

○ 大図（奥州街道：宮城県大崎市～大河原町）

「奥州街道図第七（自大河原／至古川）」

国宝：地図・絵図類 番号 51、縮尺 36,000 分の 1

「自大河原 北 五尺二寸三分八厘 至古川 東 一尺六寸六分五厘」と大河原から古川までの地図上の寸法が墨書されている。この大図の範囲は寛政12年閏4月27日～4月29日、同年10月6日～10日、享和元年11月21日～24日に測量した区間である。この区間の出来事としては寛政12年10月9日の『測量日記』の「岩沼大明神へ参詣。並に佐原油屋四郎兵衛墓へ立寄。」が知られており、『会報』57号の佐久間達夫「伊能忠敬、測量先で古里の人々と会談」に詳しく紹介されているのでご覧いただきたい。下の「大日本國東山道陸奥州驛路圖（一）」の竹駒大明神が岩沼大明神である。

油屋四郎兵衛は忠敬の書状にも登場する佐原村の豪商で、「油四」を屋号とし菜種油を製造していた。忠敬が佐原の妙薫に宛てた文化14年2月22日付の手紙（『伊能忠敬書状』45）で、領主の旗本津田家の用人栗原与膳から三月節句前の御入用として、伊能三郎右衛門家など三人に対し50両ずつ用立てるように「ひたすら御頼」が有った。このときの忠敬の指示が「泣く子と御地頭」のことだから米100俵も売り払って対応しなさいというものであった。油屋四郎兵衛も50両を用立てさせられた一人であった。

なお、創業以来350余年の歴史を有する老舗の22代目の現当主は「玉絞め」という古式搾油法にこだわって油を作り続け、日本経済新聞の「200年企業」でも紹介された。現在は「油茂」という屋号でごま油とラー油が人気商品である。



国会図書館デジタルコレクション

○ 大図（奥州街道：宮城県大河原町～福島県福島市）

「奥州街道図第六（自清水町／至大河原）」

国宝：地図・絵図類 番号 50、縮尺 36,000 分の 1

「自清水町 北 三尺六寸三分六厘 至大河原 東 二尺二寸七分七厘」と地図上の寸法が墨書されている。この大図の範囲は寛政12年閏4月25日～4月26日、同年10月10日～12日、享和元年11月24日～27日に測量した区間である。

寛政12年10月10日の『測量日記』には、大河原に到着すると「宿入口にて鈴木甚内殿に行逢対顔、本陣にて村上三郎右衛門殿に対顔。津田公御頼の御挨拶あり」とある。村上三郎右衛門常福は500石の旗本で、この年の2月には遠山金四郎景晋らと共に蝦夷地に派遣され、その帰路には、青森の蓬田で蝦夷地に向かう忠敬と出会っている。今回は蝦夷地取締御用掛として前任の三橋藤右衛門成方（会報84号に前田幸子会員の「天文曆学来歴の書付」に詳しく紹介されている）と交代するために蝦夷地へ向かうところであった。仙台から高橋至時に宛てた書状では、仙台で鈴木甚内と村上三郎右衛門が九日に大河原に泊まると知ったのでお目にかかるつもりと記している。なお、「津田公」は佐原村領主で6000石の太身旗本で西の丸御小姓組番頭の津田山城守信久である。「領民の伊能勘解由というものが御用で蝦夷地測量に行っているのによろしくと言われている」という「御挨拶」が有ったということか。

鈴木甚内はこの年の閏4月14日に忠敬に測量御用の沙汰書を渡した勘定改方である。測量日記の欄外に「鈴木公へ帰府届けの儀を伺」とある。江戸に帰着した際には「鈴木甚内様御内意被下候趣」を以て帰府届を提出した。

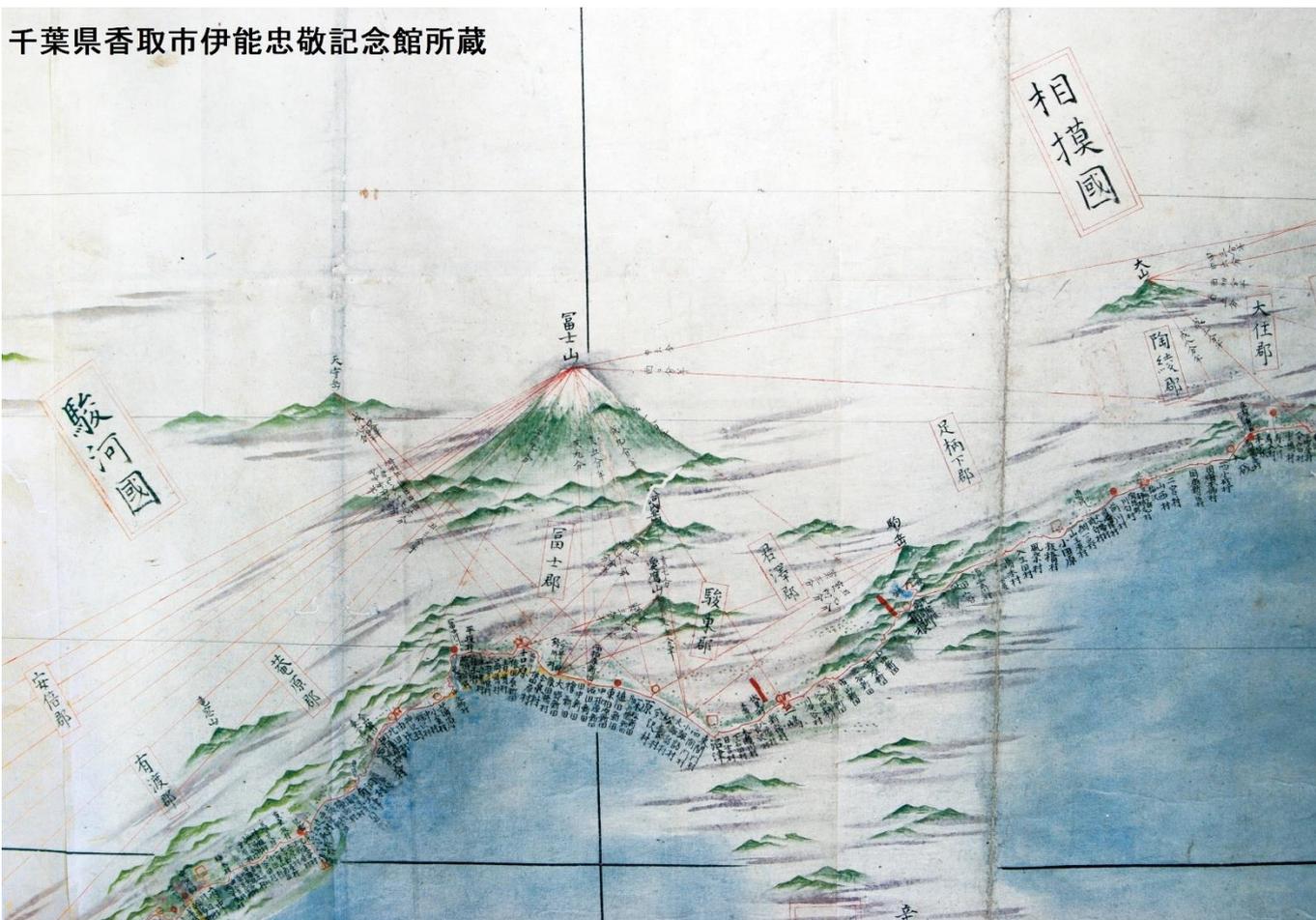
○ 中図（東海道・近畿）

「東海道歴紀州中国到越前沿海図 上」

国宝：地図・絵図類 番号 10、縮尺 216,000 分の 1 151.4×244.6cm

文化4年10月28日の『江戸日記』に「浅草へ六分図持参」とある。六分図とは1里を6分とする中図のことである。第5次測量を終えた後、約1年をかけて作成された大図、中図、小図などで、残存しているのはこの中図と、中国地方を描いた地図絵図類 11「東海道歴紀州中国到越前沿海図 下」と琵琶湖などの特別地域図だけである。

この中図では第5次測量で測量した場所のみを描いており、それ以前に測量を終えている場所には山並みや雲は描かれているが海岸線は描かれていない。下の図は中図の富士山を中心とする部分であるが、東海道の朱の測線はあるが相模湾や駿河湾の海岸線の測線は描かれていない。伊豆半島には「辛酉年測量 伊豆国」、知多半島や渥美半島には「癸亥年測量」の文字が記されている。

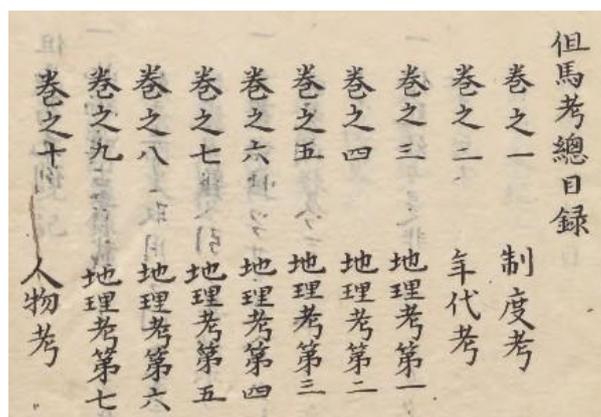


○ 地誌『但馬考』

「但馬考 卷之一～十」 国宝：典籍類 番号 383～388

忠敬の蔵書には『備陽國志』、『能登国誌』、『筑後志』などの地誌が含まれている。『但馬考』は出石藩士の桜井良翰の編纂したもので、『国書総目録』によると、江戸時代には写本で、明治に入って刊行されている。

解説プレートには入手方法不明とあるので、測量日記や書状類にも記載が無いのであろう。



○ 下図（大阪～神戸）

「出河内国茨田郡出口村至摂津国八部郡兵庫津下図」

国宝：地図・絵図類 番号 315、縮尺 36,000 分の 1
84.6×127.7cm

第5次測量の文化2年8月18日～閏8月1日、10月1日～7日と、第6次測量の文化5年2月23日～3月2日の測量の成果である。

文化2年10月7日の『測量日記』には「摩耶山に登って山島を測。それより広蔵寺へ立寄、楠公の書を一見し、生田宮へ参詣し、布引滝を一覧。楠公の碑の前にて山々を測る。楠公の碑の在所を図せん為なり」とある。右のアメリカ大図には記されていないが、この下図には「楠正成墓」の文字が記されている。また大図のサイズの下図であるがアメリカ大図とは区割りが異なる。

この大図には作図上の訂正箇所が見られる。墨と朱の測線が2本並行し、かたわらに「朱線を用」と注記されている。



○ 下図（兵庫県西部：明石～龍野）

「自播磨国明石郡大蔵谷駅至播磨国揖東郡北龍野村下図」

国宝：地図・絵図類 番号 321、縮尺 36,000 分の 1 87.9×129.5cm

「北一尺一寸六分三厘八毛 西五尺二寸六分七厘二毛」と地図上の寸法が記されている。裏面には「播磨国 大蔵谷より・塩屋織方界迄 十六」と記されている。この下図もアメリカ大図とは区割りが異なる。また、海岸線の測線の脇に朱の訂正測線が引かれ「朱線ヲ用」と注記されている箇所がある。

下図の端に「書写山円教寺本堂前」と記され測線が延びている。第7次測量（第1次九州測量）の帰路、文化8年3月3日の『測量日記』にも「書写山円教寺本堂前迄測」という記事がある。書写山には朱の方位線が集まっている。

